

2002年9月20日／エディット社員旅行「しおり」から

沖縄の自然と歴史，そして仲間の良さを見つける旅

エディットを創って12年。なぜか4年に1回の社員慰安旅行。今回はちょっぴり豪華な2泊3日の沖縄の旅。旅は道連れ，世は情けー言い古された言葉であるが，正しいと思う。いままで“縁”を大事に生きてきた。いまもそうだ。これからもそうありたいと思う。“縁”は神様が与えてくれた大切な出会い。エディットはいま37名。着実に“縁”が広がっていく。たくさんの“縁”に支えられて，いまのエディットがある。若い人が増えた。心配も増えたが，楽しみはもっと増えた。新しい出会いは人生最大の楽しみ，若い人との出会いは活力の原点だ。

この2年半，みんなよく頑張った。ほんとうに頑張ったと思う。おかげでエディットは業界でもメジャーになった。実力も着実についた。しかし社会的責任も増した。ときどき大きくつまづく。でも負けない。また元気を取り戻す。

東京オフィスも10月からスタート。小さい小さい事務所だが，出版文化のど真ん中にある。若い人が活躍する新しい砦になれば嬉しい。

旅は“自分帰り”だ。きょうから3日間，編集家業は一切ストップ。社長もチーフも教科もない。ひとりの“人間”に戻る。沖縄の自然を味わい，歴史を知り，名古屋と違った仲間の良さを見つける旅だ。帰ったあとのことは，いまはっさい考えない。すべてを忘れて1日1日を十二分に楽しむ。そういう旅行であって欲しい。私もそうするつもりだ。しかしいま，旅行中にハメをはずしそうで心配な社員の顔が何人か浮かぶ。3日間あることを忘れないで欲しい。初日が肝心だ。きょうまで若尾，田代の両幹事はよくやってくれた。みんなも積極的に協力してくれた。だから実現できた。エディットはいいメンバーばかり。私は幸せ者だ。いよいよきょうから本番。世話になっている外部の人も何人か参加してくれる。3日間よろしく頼む。そして全員，無事に気持ち良くきちんと名古屋空港へ帰ろう。

2003年10月9日／エディット社員旅行「しおり」から

2年連続の社員旅行ーリゾートホテルを利用した四国の旅

社員旅行へのメッセージは昨年の「沖縄旅行のしおり」に書いた。「たくさんの“縁”に支えられて、いまのエディットがある、旅行はそのおかげだ」と。きょうはその“縁”が“円”になり、夜は楽しい“宴”となる。

いままでエディットの社員旅行は4年に1回。若い社員に聞いてみた。「今年も行きたいか?」と。みんな、「ぜひ行きたい」と。昨年の「沖縄の旅」がとても楽しかったという。そこで決めた。「今年もやろう」と。2年連続の社員旅行は、エディットにとっては初めてだ。

今年はリゾートホテルを利用した四国の旅。少し規模は小さい。メニューを見ると、グルメの旅になりそうだ。初日の夜は高級会席スモールポーション（和食）、2日目の昼は金毘羅山で讃岐うどん、その夜は高級イタリア料理ベローナ（たぶん）、3日目の昼は神戸南京町で本場の中華料理（これは自由昼食）。食通の人はうれしいが、ダイエット中の人は悩むことになる。でも人生と同じだ。またやり直せばよい。

四国は一人で行きたいところ。八十八ヶ所遍路の旅は長年の夢。世間の埃と垢にまみれた罪深い俗人にとっては、清めと解脱の旅だ（ウソです）。でもどちらかというと、阿波踊りのほうが好きだ。今回の見学コースには入っていないが、徳島の阿波踊りはいつでも見ても感動する。名古屋の栄に夏祭りによく見に行った。東京の神楽坂でもほろ酔いかげんの足を止めてわくわくしながら見物したことがある。“宴”が“艶”になるところがいい。今回は八十四番札所の屋島寺1ヶ所と「悪縁を切り良縁を結ぶ」と言われる金毘羅さんにお参りするそうだ。やはり八十八ヶ所巡りはもう少し先に延ばそう。私の“縁”の旅はまだ終わらない。

新年を迎えて「2004年我が社はこう取り組む」（教材新聞 2004年新年特大号）

34年の編集経験をバネに――

新年を迎えるたびに、この業界で生きてこられたことを幸せに思う。教材の編集に携わって今年で34年。版元歴15年、版元+受注編集歴5年、教材の編集プロダクション「エディット」を作って14年になる。

版元在籍中は小学校・中学校・高校を中心に、通信教育教材・学校直販教材・市販書店教材・大型訪販教材・月刊宅配教材を作ってきた。独立して受注編集業を始めてからは、同じく小学校・中学校・高校教材の学校直販会社をはじめ、通信教育会社・塾教材会社・書店教材出版社・家販訪販教材会社など、たくさんの版元さんとお付き合いができた。さらに昨年からは教科書会社さんから指導書や教科書関連の仕事もいただくようになった。

おかげで、ありとあらゆる種類の教材を作らせてもらった。また、一般人を対象にした各種の資格本や実用書作りも軌道に乗り始めた。

エディットはいま社内編集スタッフがおよそ40名。若い人が多い。定着率も非常に高い。本拠地は名古屋にあるが、一昨年から東京・飯田橋にもオフィスを設けた。

業界は、いよいよ今年から小学校→中学校→高校と、一年ずつ改訂作業がスタートする。いま学習指導要領も揺れている。なかなか方針が見えにくい。大幅な改訂作業が予想される。さらに「白表紙」完全非公開で、短期間で大量の教材作りが必要になってくる。

そうした状況を踏まえた上で、いかに良質な教材作りを実現するか、そのための編集制作体制や実務作業の受け皿をどう作るか、それが我々の今年の最大の課題である。

時代に合った教材の企画をいち早く提案し、原稿執筆→編集→DTP組版→校正→製版→印刷の一連の作業をいかに効率良く、質を落とさずに行うか。教材編集歴34年の腕の見せ所でもある。

少子化、不況、学校週休2日制、教育方針の乱れ、教科書（白表紙）の情報非公開、著作権問題、どれをとっても業界は厳しい状況にある。しかしピンチはチャンス。新しいノウハウやアイデア、発想、企画が生まれる機会でもある。今年2004年を業界にとって「進化の年」と位置づけたい。

北京ブックフェア&大連DTP事情視察 6 日間

今年のAJEC海外研修は、活気あふれる中国—北京・大連の旅でした。8月31日(金)～9月5日(水)の6日間、前半は第14回北京国際図書博覧会(北京ブックフェア)開催に照準を合わせ、後半は伸張激しい大連DTP業界の視察を中心に実施しました。

参加者は、会員社ではオフィス 201 の細江弘司氏、TU・TI編集室の土田俊子氏、カルチャー・プロの塩川政春氏、エディットの小林哲夫の4名、ほか会員社以外で2名の計6名でした。

●北京ブックフェア—意気盛んな欧米の出版社

北京ブックフェア(正式名:北京国際図書博覧会)はデータによると、1986年に初開催され、今年で21年目(当初は2年に1度の開催であったため、回数としては今年が14回目)だそうです。中国新聞出版総署、国務院新聞弁公室などの関連政府部門が主催者で、アジア最大の国際ブックフェアとされています。

昨年のデータによると、出展者数は1,718(海外1,207、国内511)、総ブース数は1,189(うち日本企業36)、入場者数は22万人。

今年は、主催者の発表によれば、参加国・地域数は59カ国・地域、総ブース数は1,463となっており、入場者数は会期が1日延びて前回の22万人を大きく超えると言われています。

今年行われた東京国際ブックフェアは主催者の発表で、出展者数749社、海外29カ国、入場者数5万5000人ですので、北京ブックフェアの規模の大きさは想像できるかと思えます。

日本の北京ブックフェアへの今年の参加は、日本事務局によると、出展は38ブース149社になっています。しかし実際に会場を回ってみると、24ブースほどで、人通りも少なく、展示物も貧弱、スタッフも少数で、「寂しい」の一言でした。

それに比べて、主催国の中国はもとより日本以外の海外のブースは活気に溢れ、その熱気と観客数は目を見張るものがありました。

とくにドイツ・アメリカ・フランス・スペイン・イタリアなど欧米系の出版社はブース

の規模も大きく、スタッフの動きやイベントも活発で、世界の出版界がいかにかに中国マーケットを意識しているか、よくわかりました。

10年近く東京国際ブックフェアに出展している自分としては、同じ「国際」を冠したイベントでも、こんなに違うものかと、たいへんショックでした。

それにしても日本ブースの元気のなさはとても気になりました。

●大連DTP事情ー日本に追いつけ、追い越せ

大連は「日本国・大連県」と言われるほど日本にとっては身近なところですが。また「大連の街から」という歌にもあるようにとてもきれいな街です。

私は4～5回ほど仕事がらみで訪れていますが、いつも街には新しいビルが建ち、DTPに取り組む会社やスタッフも倍々に増え、技術もレベルアップしていて、その伸張ぶりに驚かされます。

今回はDTPの会社3社(大連文博信息技术有限公司、大連光進技術有限公司、大連英浩信息技术有限公司)と専門学校1校(大連電子学校)を訪問しました。

今年の春の「教材・デジタル合同部会」で講師をお願いしたエコーインテック(株)社長・尾頭豊氏の計らいで、3社1校ともたいへん歓迎していただき、詳細な業務内容やいくつか作品をていねいに紹介していただきました。

DTP会社3社はともに日本と同じインデザインやエディカラーを武器に日本語組版業務をしている会社です。顧客は100%日本の企業です。大連電子学校も日本の企業とタイアップして、産学協同の実務教育を行っています。

大連と日本との結びつきは想像以上です。大連の若者たちも日本語を学び、日本の技術を修得して、自分の家族の幸せのために日々がんばっています。そのパワーにはいつもびっくりさせられます。品質・コスト・スピードー日本企業が追い求めてきたビジネステーマを、彼らはもっと早い速度でクリアしようとしています。我々日本の出版・印刷業界も彼らとの新しい付き合い方がいま求められています。

●中国ースケールの大きさに驚く

北京では、ブックフェア以外に世界遺産の天壇公園、天安門広場、故宮、頤和園、万里の長城、古き良き北京の胡同(フートン)と廻り、北京ダック、四川火鍋料理を賞味、大連では、DTP視察以外に大連港やロシア風情街、星海公園、大連商城を歩き、餃子料理や

海鮮料理を堪能。すべてに渡って中国のスケールの大きさに驚いた6日間でした。